

悪霊めに憑かれて
荒野のなかを
堂々巡りする羽目か

A・プーシキン

二二が四は
死のはじまり

M・ドストエフスキー

二〇三〇年、六月六日、午後一時。

五人は、鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」にいる。

鎌倉署署長、山風健一。

私立探偵、郷田狂介。

麻暮正作のかつての手下、車椅子の小林金助。

金助の息子で大泥棒だった、竹田金之助。

麻暮正作の現在の片腕、釣具屋の玄治。

以上の五人である。

店主の立原正男が気をきかせて、事前に知り合いの店から、直径約二メートルの丸テーブルを借りてきた。

そこに五人が顔を合わせている。

丸テーブル上の真ん中には、山風が持って来た、黄金仮面と鉄仮面が置かれている。

黄金仮面の片頬が欠けている。

鉄仮面の真ん中にはヒビがはいっている。

五人共に沈思黙考している。

蒸し暑い。

空調は除湿になっているが、梅雨入りも近く、湿度は半端ではない。

制服の山風署長と、スーツ姿の郷田は、上着を脱いだ。

他の三人はラフな恰好をしている。
それでも皆ときどき、ハンカチやハンドタオルで額や首筋の汗を拭った。

ようやく郷田が、アイスコーヒーの残りを飲み干してから、おもむろに口を開く。
「もう十日経ったのね。
諦めなくちゃいけないかしらん」
金助も重い口を開く。
「麻暮のだんなは不滅です。
あちきは諦めませんぜ」
続いて玄治。
「遺体があがっていない以上、諦める必要はありませんよ」
続いて金之助。
「自分が開けたあそこから、コードの中に入り込んでしまったという可能性はありませんか」
郷田は頷いて、
「それは有り得ますね。
でも、そうだとすると、あの中は放射能が凄いですから、そういつまでも持ちませんよ」
金之助は済まなそうに、
「コンピュータを破壊しちまいましたから、どちらにせよ、あそこから入って助ける手立てはなくなっています」
玄治は皆の顔を眺め廻してから、
「手立てがないことはないです。
つまり、あのコードを根元から切断してしまうのです。
ええ、そうすると、海水が猛烈な勢いで入り込むし、防水壁は作動しないし、一か八かということなのですがね。
一か八かを、吉凶くらいに持って行くなら、切断と同時に蓋を取り付ける事です。
しかもその蓋は、潜水艦のハッチのように、海面に浮き上がらなければなりません」
「それがいい、それにしろ」
山風が叫んだ。
「それでも一つ大きな問題があります」
玄治が云った。
「それは何かね」
山風が聞いた。
「万一救えたとして、救った相手が、麻暮先生ではなく、荒野大三郎だなんてことがあるかもしれません」
玄治が答えた。
「そうよ、そうよ。」

最初から解きたくない問題ね。

「というか、最凶のラストシーンかしらん」

と郷田。

金助は、車椅子を丸テーブルにできるだけ近づけながら、

「あちきは問題ではないと思いやす。

もし救い出したのが荒野だったとしても、荒野から麻暮のだんなの消息が聞けるかもしれない」

郷田は微妙な笑いを作って、

「そうよ、そうよ。

荒野ってさ、あんがい紳士じゃなあい」

金助は首をふりふり、

「そこが曲者でね。

あの厳粛な声、あの優雅な口調、あの謙虚な身のこなしで、みんな騙される」

金之助は苦い顔で、

「自分が一目したかぎりでは、まさしく悪霊の空気を漂わせていましたね。

スケールはまったく違うが、自分は大泥棒の師匠を思い出したものです。

師匠が決行するときには、いつも静かで優しい。

けれども、配下が失態をしたときの眼光は、その眼光だけでもう殺された気分になるとのこと」

山風は遠くを視る眼で、

「竹田金之助さんの師匠は、私も覚えている。

取り調べでも、いつも物静かで、謙虚な姿勢を崩さないんだが、どうやっても口を割らない。

あの凄さ無気味さは、接した者でないと解らない。

荒野大三郎を私は見たことがないが、きっとそういう人物なんだろうな」

郷田は変に眼を輝かせ、

「そうよ、そうよ。

荒野は人物と呼ぶのが相応しい人ね。

ねえ、荒野ってどこか麻暮さんに似てなあい」

金助はやや俯いて、

「麻暮のだんなは、荒野の義兄でやんす。

あちきは、大昔初めて紹介されたとき、荒野を麻暮のだんなの実弟かと思ひ込んだもので」

山風は、みんなを制して、

「そういう話はともかくとして、猶予はない。

長期予報では、近く暴風雨が来る。

具体的に、いつ、だれが、なにをやるか。

それをここで決めようではないか」

すぐに、金之助が手をあげた。

おもむろに玄治が手をあげる。
やっとそれから、郷田が渋々手をあげる。
「よし、決まった。
というか、この三人に頼むしかないのだ。
計画や準備に最低三日かかるとして、ときは三日後の六月九日。
郷田君の好きなシックスナインだ」
「あたしはそんなの好きじゃないわよん」
郷田の否定を無視して、山風は声高らかに、
「午後一、コードの根元をぶったぎる。
さあ、すぐに準備に取りかかってくれ。
予算は鎌倉署で何とかする」
すると玄治が、
「皆さんはまだ確認されていないでしょうが、麻暮先生が我々の銀行口座に、多額の金を入れてくれています。
その金の一部で、大掛かりな準備ができます」
金助は禿頭を搔きながら、
「まったく、麻暮のだんなはいつもそうだ」
続けて金之助に向かって、
「ロボットのタナカ君にも、協力を頼むといいぜ。
彼は、いや彼女は、頼りになるはずさ」
金之助は力強く頷いた。

二〇三〇年、六月七日、午前十時。

仮眠から眼を覚ました麻暮正作は、何度も大欠伸をしている。
その大欠伸で荒野大三郎を起こすつもりなのだろうが、熟睡しているのか、眼を覚ます気配がない。
「ふん、つまらん」
麻暮は我知らず、小さくつぶやく。
いまの状況がつまらないのではなく、荒野が眠っていて話し相手がないのがつまらないのだ。
「麻暮サン、映画ノ話ノ続キヲ、シマシヨウカ。
ソレトモ、マズハ、闇猫教授ヲ、殺害シタ時ノ、感触デモ、オ聞キシマシヨウカ。
プフイ」
闇の中で、荒野が唖れた声を出した。
荒野は眠っていたのではなく、仮眠の麻暮の邪魔をしないよう静かにしていただけなのだ。

麻暮は、悦びと哀しみの入り交じった声で、
「バケ猫をやっつけたからといって、殺害なんて言い方をしないでくれんかね。
それに奴は、朝山完吉の生まれ変わりを名のったが、先生の知識や知恵が毛ほどもないではないか。
あれはまさしく突然変異のバケ猫、いやバカ猫にすぎんよ。
ケケケ」
何の前ぶれもなく、そのとき、
「ばかねこ、たあ、だれのこっちゃ」
闇猫に似た声だが、どうやら女声だ。
麻暮は身構えて、
「お前はもしかして」
「あたい、ねこひめ。
ばかねこの、むすめだよ」
「親の仇を取りに出て来たのかい」
「いみのないこと、やらん。
にくしみ、れんさ。
あさぐれと、ちがう」
「それならどうして出て来たんだい」
「この、うつくしい、かお、からだ。
みせるため、でてきた、なんてね。
そんなわけ、ねえだろ」
「面倒臭い娘だな。
ボクはお相手はご免だね。
荒野にまかせるよ。
ケケケ」
ふられた荒野は苦笑して、
「オ嬢サン、何か御用デスカ」
「おじょうさん、たあ、よくいってくれた、もんだ。
あさぐれ、ちがって、こうや、はなし、わかりそうじゃねえか」
「ソレハ、買イ被リデス。
デモ、闇猫教授ハ、可哀想ナ事ヲシマシタ。
何シロ、コノ麻暮サンハ、気ガ短イデスカラネエ」
「じじい、だからよ。
じじい、きがみじかい」
「私モ爺デス。
年齢的ニハ曾曾爺」
「そうだったな。
おまえたち、じじい。
かねの、もうじゃ」

「金ノ亡者デスト。

何ヲ根拠ニ」

不満げな荒野の声に、猫姫は声を荒げる。

「こんきょ、たあ、わらわせるぜ。

おまえたちのこと、ぜんぶ、しってるんだ。

こうやおおさぶろう、べつめい、まつもとげんしん。

せいじ、くろまく。

こうやおおさぶろう、べつめい、きたやまきよくさい。

びじゅつ、きょしょう。

こうやおおさぶろう、べつめい、くさかてんぜん。

しゅうきょう、きょうそ。

しさん、ぼうだい。

ちきゅう、ぜんめつのため、つかう」

「よくぞ云った。

荒野は、悪魔の権化よ。

猫姫こそ教授だ」

「あさぐれ、おなじ、あくま。

たんてい、ななじゅうねん。

やまうちさんぞう、のみならず。

せけんのかねもち、ざいさん、はきだす。

つまらぬ、ちょうさ、いらいひ、ぼうだい。

しさん、ぼうだい。

こうや、はめつのため、つかう」

「くそったれのバケ猫め。

そんなことを云うために現れたのかい」

「あたい、あくま、ちがう。

あたい、かみさま。

おまえたち、くだらん。

おまえたち、つまらん。

にんげん、ちっぼけ。

おまえたち、ちっぼけ。

だいじぎょう、やっとる、つもりかよ」

「麻暮サンハ、トモカク、私ハ、人類ノタメ、活動シテイマス。

人類滅亡。

ソレガ、人類ノタメナノデス。

プフイ」

荒野は精一杯厳粛に云った。

麻暮は負けていなかった。

「その野望を打ち砕くのが、ボクの天命さ。

まさしく人類を救う大事業でなくて、何と云うのか。

ケケケ」

猫姫は莫迦笑いをしてから、

「だから、おまえたち、くだらん。

だから、おまえたち、つまらん。

なぜなら、おまえたち、しさん、ぬきで、なにできる。

そういうの、おぼけのせかい、きんけん、いうんだぜ」

「金権、金権、金権だと。

ほざくな、バケ猫。

目的あつての金集めだぜ。

目的なしだったら、金集め要らん」

麻暮はいささかムキになって云った。

「金権、結構。

正直、私ハ、金モチデス。

モシカスルト、世界一ノ、金モチカモシレマセン。

シカシ、私ハ、自分ノ贅沢ニ、使ッタ事ハアリマセン」

荒野もいささかムキになっていた。

「だから、くだらん、つまらん、いうんだよ。

こうやおおさぶろう、そのやぼう、つまりぜいたく。

あさぐれせいさく、そのやぼう、つまりぜいたく。

けっきょく、じぶんの、ぜいたく、じゃねえか」

猫姫の声音は、麻暮や荒野よりも数倍強い。

麻暮は舌打ちをし、荒野は溜息をついた。

しばし間を置いて、麻暮が毒づく。

「おまえの親父は、胡散臭い謎々を出した。

答えられたら、自分がボクらの救世主になると、威張っていた。

だが、どうやら荒野だけを救いたかったらしい。

それで、ボクに呆気なく退治された。

口ほどにもないバケ猫の父娘め」

猫姫は益々声を荒げて、

「なぞなぞ、ほんきで、こたえる。

そのとき、こたえ、ほんもの。

なぞなぞ、ばかにする。

うんこくさい、なんていう。

そいつ、もはや、ほんもの、とおい」

このとき荒野が、猫姫よりも声高に、朗々と、何やら外国の芝居の主人公めいて、

「全人類ニ与エラレタモノヲ、私ハ自ラ味ワオウ。

私ノ全神経、全精神ヲモッテ、最高最新ノモノヲ発見シ、全人類ノ天国ト地獄ヲ、

私ノ胸ニ刻モウ。

イズレ、全人類ト共ニ、ツイニハ私自身モ、滅ビルトシヨウ」

麻暮は、苦虫を噛み潰す気分で、

「君の云う事は、ボクには正直解らないんだよん。

それは、ボクの知能が低いだけではなく、君の知能が高いだけではなく、君が神を気取っているから、解らないんだ。

ボクは君が神である世界を認めないんだ。

それが個人の自由とはいふものの、まったく許せないんだ。

ボクが認めないのは神じゃないんだよ、君なんだよん。

荒野よ、恥を知れ、とボクは云いたいのだ。

在るか在らないか、証拠もない神が、地には平和あれ、と宣うているにもかかわらず、君は何者の許しを得て、地には戦争あれ、人類には破滅あれと云うのだい」

「私ガ、モシ神デアッタナラ、ソレハ破壊神トイウモノデス。

麻暮サンハ、悪魔、ト私ヲ呼ブデハナイデスカ」

プフイ」

「そこなんだ、そこなんだよん。

ボクは、君と接していると、いや接しないまでも、君のことを考えると、神と悪魔は一心同体と思われるんだ。

ケケケ」

麻暮の例の笑いは、ひどく掠れて、ケケケがクククと聴こえた。

「麻暮サンハ、私ヲ、神ヲ気取ッタ悪魔、ト云ウ。

ソシテ、私ハ、悪魔ヲ装ッタ神、ト自ラヲ呼ビタイ。

ナラバ、ソノ神トハ、悪魔トハ、一体ドウイウ者デシヨウ。

ドウイウ姿ヲシテ、ドウイウ事ヲスルノデシヨウ。

プフイ」

「それが解れば苦労はしない。

ただ一つ云えるのは、もし神であれ悪魔であれ、そういう存在があったとしたなら、まさしく君と同じ、おぞましい姿で、おぞましい事をするだろうよん。

まったく、死なんか。

死んじまえば、死の恐怖なんかないんだ。

死んじまえば、神も悪魔もあるもんか。

ケケケ」

「私ハココデ、リルケノ言葉ヲ、麻暮サンニ与エヨウ。

【僕は一人でいても、やはり死の恐怖を感じた。

僕は恥を忘れて告白しなければならぬが、無気味な死の恐怖のために夜半ベッドの上に起き上がったことも一度や二度ではなかったのだ。

少なくとも起きてすわっていることが何か生きているしるしであり、死んだ人間はすわることもできぬだろうと、僕は真面目にそんなはかない言い訳を考えていた。

そのころの僕は、いつも異境のただ偶然に与えられた部屋の中で起き伏ししていたのだ。

病気にでもなると、異境の冷酷な部屋は、かかりあいになったり巻き添えをくつてりするのを恐れるかのように、容赦なく僕を孤独へ突き放した。

僕は一人すわっていた。

おそらく、僕はひどくおっかない顔をしていたのに違いない。

僕に親しく話しかける勇気が、部屋の家具や道具類にはどうしても出てこぬらしかった。

僕たちにとって、死の恐怖は強すぎるに違いないが、それでも本当は僕たちの最後の力だと、僕はそんなふう考えている】

イカガデショウ」

「ボクにとって『マルテの手記』は、『聖書』ほど身につまされるものではない。

ボクは詩人ではないが、君は詩人だよん」

「ソレハオ誉メニ預カッテ、恐縮デス。

本当ハ私ノ事、詩人デハナク、死人ト言イタイノデショウ。

プフイ、キリストモ詩人デシタネ」

「死人でもあった。

復活なんて嘘っぱちさ。

キリストが復活できないのに、荒野が復活できるわけがない。

ケケッケケッ」

二人の間答に、猫姫が黙っているわけがない。

「おまえら、にんげん。

あたい、ないがしろ、しとるな。

おばけ、のけもの、するきか。

おばけ、のけもの、いちばんきらい。

おまえら、ろくな、しにかた、せんぞ」

麻暮はわざと呆れ果てた声を出し、

「だいたいさあ、闇猫が出て来たのも、不自然だし、今度は猫姫だなんて、暗闇で青天の霹靂だよん。

ボクが知るかぎり、バケ猫の登場には、必然性というものがあるはずなんだ。

ボクは不愉快だねん」

「やはり、おまえ、ぼけおやじ。

えいが、ちがう。

あたい、ばけねこえいが、だいきらい。

みたな、とか、あぶら、なめるとか。

あほじゃ、あほじゃ」

「さすがに、この闇じゃ、見たなとは云えんだらう。

そうか、おまえは、油が嫌いか。

放射能は好きそうだな。

ケケケ」

「ほうしゃのう、いうな。

げんしりよく、いえ。

じだいは、あぶら、じゃない。

じだいは、げんしりよく。

あたい、じだいの、もうしご」

「ううむ、やっぱり、闇猫も猫姫も、荒野と同次元の輩だな」

麻暮は、葡萄酒の壺を再び握り締めた。

(今度は一撃では済みそうにないな)

と、思って、左右の手に一本ずつ持った。

同時に振りかぶった。

猫姫が叫ぶ。

「あたい、ころすきか。

あたい、おやじとちがう。

あたい、しない。

ころしても、しない。

やるなら、やってみい。

あさぐれ、ひとごろし」

麻暮は、ひとまず壺を置いて、

「バケ猫殺しても、人殺しになるのか。

そんなら、雑草摘んでも、人殺しか」

猫姫は鼻を鳴らしてから、

「ひと、を、ころす、ひとごろし。

ひと、が、ころす、ひとごろし。

おまえの、すきな、じげんだよ」

「言葉の綾かい」

「あや、ちがう。

おばけでも、なんでも、ころす。

それ、にんげん、けんりない。

それできる、かみか、あくまだけ」

「理屈はもうこりごりだ。

生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」

「それなら、もんだい、ない。

きゅうしゅつたい、うごいた。

きょうすけ、きんのすけ、げんじ、ちゅうしん」

「何だって。

狂介、金之助、玄治の救出隊だと。

猫姫がどうしてそんな事、知っとるんじゃ」

「ねこひめ、よげんしゃ。
きりすと、ふっかつ、ある。
ねこひめ、きりすと、さいらい。
おまえたち、ゆだ。
ゆだ、もうすぐ、たすかる。
きょう、ろくがつ、なな。
きゅう、たすかる」
「ほんまか、ケケケ。
六月九日か、いい日だ。
あの三人が中心なら、助かるのはボクだけだね。
荒野この巨大コードと共に、大平洋に眠るに違いない」
「あさぐれ、あさはか。
あさはか、あさぐれ」
「莫迦にしやがって」
麻暮は再び壘を握った。
「ばかは、おまえ。
おまえは、ばか。
きょうすけ、はむれっと。
はむれっと、きょうすけ」
「意味が解らん。
郷田狂介が、ハムレットだと。
ハムレットはボクだよ」
猫姫はいささか声を落とし、かなり意地悪げに、
「きょうすけ、たすけたい、あさぐれ、ちがう。
きょうすけ、たすけたい、ほんとは、こうや。
そんな、いやなかお、するな。
おまえのかお、あたいに、みえる。
おまえ、いささか、かんずいていたな。
きょうすけ、おかまの、おかまに、ひがついた」
「変態だからなあ。
化け物に惚れても、不思議はないと考えてはいたが。
同じ化け物なら、ボクに惚れてくれればいいんだがね。
ケケケ。
ボクには金助がいるから、妬いたかもねん」
「おまえ、しょっく、ないか」
「あるわけがない。
人間が思う事は止められない。
海の事は玄治のお手のもの。
玄治が仕切るはずだから、心配はない。」

しかし、これからは、郷田狂介とボクの、探偵同志の闘いになりそうだねん。
まずはそれに勝たないと、荒野と荒野の野望を抹殺する事はできないだろうな」
麻暮は溜息をついた。
まるで百年の溜息で、それは長く続いた。

その間、荒野は黙っていた。
猫姫が喋り始めたのは、荒野の代わりのつもりだったのだろう。
「いつまで、こうやと、たたかう。
どこまで、こうやと、たたかう」
「いつまでも、どこまでも」
と麻暮は強く即答した。
「どうして、こだわる。
どうして、ほっとけない。
ほっとくと、じんるい、めつぼう、だからか。
そんなちから、こうやに、ある、おもうか」
「荒野とは長いつきあいだ。
おそらく荒野を最も解っているのは、ボクだ。
郷田狂介のような人間が生まれるのも、荒野の力だ。
膨大な金があるのも、荒野の力だ。
それ以上に、悪魔の力がある」
「あくまの、ちから、わかんない。
あたいの、わかるよう、ぐたいてきに、しゃべろ」
「具体的に喋れたら、悪魔の力だなんて云わないよん。
荒野の存在そのものが抽象的だ。
だから、抽象的な表現をするのがいいんだ」
「そうか。
すると、こうやは、ぐたいてきな、だっしゅつ、むりか。
ちゅうしょうてきな、だっしゅつ、たあ、なんじゃ」
「抽象的な脱出。
たぶん、そうなる」
云ってから、麻暮は荒野がいるはずの方角に向かって、
「狂介の愛を受け止め、脱出。
これほど抽象的な脱出はあるまいよ」
集中力を発揮した『マルテの手記』の朗読で、声が掠れてしまった荒野は、久し振りに声を出した。
「愛、愛デスト、プフイ。
コノ世界ニ、モシモ愛ガアルナラ、私ハ壊滅サセタリ、シマセンヨ」
「愛はあるんだよ。
だが愛は見えないから、証拠を提示できない」

「愛ナンテ言葉ハ、スデニ死語デス」

「命を賭けて救出しようとする、それは愛ではないのか」

「愛デハアリマセン。

愛ニ似テイル、何かデス。

麻暮サンハ、愛ニツイテ、普段考エタ事モナイノニ、口走ラナイハウガイイデスヨ」

「莫迦云うな。

ボクは、愛の探偵だよん。

ボクにとって、愛は死語なんかじゃない。

自分の為ではなく、他人の為に何かをする。

辞書にどう書いてあるか知らんが、それがボクの愛さ。

自分の為にしか、何もしてこなかった君には、理解不能だろうがね。

ケケケ」

「ナルホド。

麻暮サンニトツテハ、偽善ガ愛デスカ。

麻暮サンハ、自己愛ッテ言葉ヲ、知ラナイノデスカ。

プフイ」

「それは、それこそ、言葉の綾さ。

何でもかんでも、愛を付ければ辻褃が合うと、考えた連中の誤魔化しさ。

愛嬌、愛敬、愛郷、愛惜、愛欲、渴愛、割愛、愛称、愛唱、愛妾、愛染かつら。

ラ・ロシュフコーいわく。

【自己愛こそはあらゆる阿諛追従の徒の最たるものである】

ケケッケ」

「例エバ、戦争ヤ早魘デ食ベル物モナク、飢エテ死ヌ子供達。

例エバ、親ニ酷ク虐待サレテ、声モナク死ヌ子供達。

例エバ、地震ヤ津波ノ為ニ、泥濘ノ中デ死ヌ子供達。

例エバ、不治ノ病気デ、骸骨トナッテ死ヌ子供達。

コウイウ子供達ハ、私ニトツテ、正ニ自己ソノモノナノデス」

「屁理屈を云うな。

あれこれ屁理屈を云われると、君とボクの思想はイコールになってしまう」

「いこーる、なんだよ。

おまえたち、いこーる、すこーる、かたこーる。

おまえたち、そのかお、みにくいかお。

ぐちゃぐちゃ、にく、かたまり。

め、どこ、はな、どこ、くち、どこ。

おまえたち、おなじ、かお。

かお、おなじ、かんがえ、おなじ」

「さすがに、闇猫の娘。

闇のなかでも、ボクたちがよく見えるとみえる。

だが、猫姫よ、バケ猫よ。

ぐちゃぐちゃになる前は、全く違う顔だったんだよ。

そうしてさ、荒野もボクも、大昔から考えは全く変わってはいないんだよ。

バケ猫の化けの皮が剥がれたな」

麻暮は握ったままでいた壘を振り上げた。

「猫姫、覚悟」

鋭い叫びと共に、麻暮の両手の葡萄酒の壘が二本、同時に暗闇に振りおろされた。

暗闇の猫姫に。

「ぎゃ」

と一声あげて、猫姫は潰れた。

「麻暮サン、カ弱キキ乙女ヲ、殺シタノデスカ。

化ケテ出マスヨ」

「バケ猫は嫌いじゃない。

だが、猫姫は、消さねばならない」

「可哀想ニ。

相変ワラズ、残忍、冷酷デスネ」

「薄々気づいてはいたが、闇猫も猫姫も、君とボクが生んだ幻想だよ。

その幻想を抹殺したのだ。

君とボクのためにね」

「デスカラ、闇猫モ猫姫モ、私タチノ無聊ヲ慰メルタメニ、突然変異デ誕生シタノ
デス」

「何の突然変異だ」

「ソレハ、サッキモ云ッタデショウ、放射能ノ突然変異。

ゴジラデナク、闇猫猫姫デヨカッタノデスヨ」

「確かに無聊は慰められたかも知れんが、随分とくだらぬ討論をしてしまった。

映画の話のほうが、百倍もよかった」

あいつらはお邪魔虫さ」

「プフイ、南無阿弥陀佛。

デハ又、映画ノ話ヲシマショウカ」

「やめておこう。

映画双六ができるなら、やるがねん。

君とボクは、議論なんかしちゃいけない関係なんだ。

いまは、救助隊の活躍を愉しみに、葡萄酒でも飲み続けるに限る。

そうだ、ボクも詩を朗読しよう。

ボクが選ぶんだから、当然日本の詩人だ。

田村隆一。

【一篇の詩が生まれるためには
われわれは殺さなければならない
多くのものを殺さなければならない
多くの愛するものを射殺し、暗殺し、毒殺するのだ

一篇の詩を生むためには
われわれは美しいものを殺さなければならない
これは死者を甦らせるただひとつの道であり
われわれはその道を行かなければならない】

そうさ。
君は、君の理想の詩を生むために、多くの愛すべき人びとを殺したのだ。
ボクは、甦るために、美しい幻想を殺したのだ。
これが、君とボクの議論の結論だよ。
ケケケ」

二〇三〇年、六月八日、午後十時。

三人プラスロボットは、釣具屋の二階にいる。
郷田狂介、竹田金之助、玄治、タナカ、である。
「いよいよ明日、一時に決行よ」
郷田がコップ酒を掲げて叫んだ。
「準備万端、手抜き無し」
金之助も叫んだ。
「いまぞゆく、いまぞゆく」
玄治も珍しく興奮していた。
タナカだけが落ち着いて、
「スーパーマン、バットマン、スパイダーマン、ウルトラマン、デロリンマン、スーパーヒーロー数アレド、荒野サンモ、麻暮サンモ、負ケテハイナイワネ」
「年齢的にはそれ以上だね。
スーパーマンだって、百歳になったら飛べないだろう」
玄治が云うと、
「おやじの金助に聞いたんですが、麻暮先生は百歳を疾うに超えていると。
荒野社長は麻暮先生の義弟だけれど、同い年だそうです」
金之助が続けた。
「あたしにとっちゃあ、伝説よね。
あたしが敬愛していた、不死身の探偵舟木英介さんでも、七十歳で引退している

もん」

郷田が云うと、

「ええ、かつて『死んだる団』事件の渦中にいた、舟木先生。

自分も実は、若い頃に随分と、舟木先生にはお世話になりました」

金之助が続けた。

「まさか、麻暮さんにとっての金助さんの役目を、金之助さんが」

玄治が確認すると、

「ええ、舟木先生の手下をしていた事があります。

舟木先生は麻暮先生と、いわば張り合った『死んだる団』事件で、麻暮先生がおやじの金助を上手く使うので、いつも先手を取られていました。

自分が金助の息子である事を、すでに調べあげていた舟木先生は、自分を手下にする事によって、麻暮先生と同等の探偵力を作り上げたいと望んだのです」

「それで、その望みは叶ったというわけですね」

玄治が云うと、金之助は頭を搔いて、

「いやはや、自分の盗癖が、舟木先生にとってはおそらく頭痛の種でして。

自分に較べておやじの金助は清廉潔白、どこか江戸時代の武士に仕える、一途な中間を思わせるところがあると、舟木先生は云っていましたね」

「昔話はこれでおしまいね。

あたしなんか、昔話をしだしたら、朝になっちまうもの」

郷田が笑顔で云うと、皆も頷いた。

「それなら、明日午後一スタートの、救出計画シュミレーションをやりましょう」

玄治は云ってから、パソコンをONにした。

画面では、イラスト化されたコードが、「未来計画カンパニー」の地下から延びていた。

空も海もきれいな青だったが、物がよく見えるようその青は、限りなく透明に近いブルーだった。

玄治がマウスを動かすと、クレーンに吊るされた特製の蓋が、空から徐々に降りてくる。

凄まじい音。

その蓋には、特製のジェット装置を付けた人間が一人、特製の防災服を着て、特製の酸素ボンベを背負った人間が二人。

三人はそれぞれ、異なったポジションにいる。

特製の蓋が、コードの根元を切断し、同時にコードの切り口を塞ぐ。

それは静かに海面に浮き上がる。

特製の蓋には、特製の出入口（昇降口）が付いている。

「クレーン動かすのは、タナカ君。

金之助さんは、蓋の外にいて、出て来た麻暮先生を抱いて空へ。

郷田さんとわたしは、コードの中へ。

分担は、わたしが戦闘、郷田さんが救出。
念のために山風署長が、海上自衛隊を手配しています。
詳細は打ち合わせの通り。

何かご質問は」

玄治の言葉に、郷田が、

「あの凄まじい感じの音、どうにかならないの」

「あの音は、中の二人に、我々の救出を知らせるためのものでもあります」

「なるほど。」

それで再確認だけど、二人とも助けるのね」

「それは前にも云った通り。」

二人とも自分一人だけが助かるうとは思わないでしょうからね」

「そうね。」

で、この二つの仮面は」

「郷田さんに持参してもらいます。」

「外界に出る前に付けてあげないと」

「解ったわ。」

必ず付けてあげましょう。

「付けないと、あたし、子供ができちゃうから」

「いまこのときに、冗談はやめてください。」

でも、子供で思い出したんだけど、もしかすると、あのコードの中には、麻暮先生、荒野社長の他に何者かがいるかもしれません。

「いやもしかすると、麻暮先生と荒野社長はいなくて、凄まじい化け物だけがいるのかもしれない」

「戦闘は、玄治さんの役割よね」

「はい。」

それで、もしもそういう場合には、わたしをコードの中に残したまま昇降口を締め、もう開かないようにしてください」

「困に、切断されたコードって、どうなるのよ」

「救出の制限時間は、おそらく約一時間。」

その後、コードは潮の流れと共に、先の方へ太平洋の方へ世界を破壊する塊の方へと、流されて行きます」

「一時間かあ。」

玄治さんの思惑ではどうなのよ」

「コンピュータの計算では、ほぼ三十分で脱出成功となっています。」

「けれども」

「けれども、なあに」

「突発」

「トッパツって、なあに」

「ゴジラの登場」

「まさか」

「まさかが起こるのが、江ノ島です」

「ゴジラは、海上自衛隊におまかせね」

「それより怖いのが、天候と天災です。

暴風雨もしくは津波」

「でも天気予報は快晴ね」

「はずれるのが、天気予報です」

「とにかく祈るしかないわね」

「ええ。

準備は万端なので、雨天決行、ゴジラ出ても決行で、皆さんよろしいですね」
全員が頷いた。

二〇三〇年、六月九日、午後一時。

三人プラスロボットは、装着を済ませ、予定の位置に付いている。 郷田狂介、
玄治、竹田金之助、タナカ、である。

朝からの小雨が、次第次第に強くなり、昼からは暴風雨になった。

金之助は、装着したジェットが稼動するか不安があったので、一応玄治に確認したが、

「決行」

という答だった。

重戦車に似た起重機に乗ったタナカが操作すると、巨大な特製の蓋が舞い上がる。
凄まじい音が、暴風雨の音と相俟って、この世の音とは思われない。

大きく烈しく揺れると、そこに乗った郷田と玄治と金之助は、振り落とされない
よう、クレーンの鉄骨にしがみつく。

タナカの懸命な操作によって、蓋の鋭い刃の部分が海面を突き破る。

そのまま巨大コードの根元を切断する。

同時に蓋となる。

直後に浮き上がり、目で合図した郷田と玄治が昇降口を開けて中に潜り込む。

金之助は蓋の上で待つ。

暴風雨が唸りをあげているが、いざとなったらジェットを噴射させるつもりでい
る。

コンピュータの計算と違ったのは、コードの中に予想を百倍ほども上回る、多量
の海水が流れ込んだ事だった。

酸素ボンベを背負った郷田と玄治は問題ないが、コードの中にいると思われる麻
暮正作と荒野大三郎は間違いなく遠く流されているはずだった。

玄治は仕種で、郷田にそこで待機するよう伝えた。

それから、制限時間が来たら、もしも自分が戻らなくとも脱出するよう、身ぶり手ぶりで郷田に伝えた。

そうして自分は、コードの奥へ奥へと、海水をかき分けながら入って行った。

無闇に時間だけが経過した。

海水はだいぶ引いていたが、玄治は戻らない。

郷田は貧乏ゆすりをしながら、待つしかなかった。

すると、郷田の額に付けたライトに、人影が入った。

だが、人影は一人だった。

玄治が諦めて戻ってきたのかと思ったが、様子が違った。

人影は郷田の眼の先まで這って来て、そこで倒れた。

全身が海水に漬かったので、郷田は助け起こした。

麻暮か、荒野か。

郷田の勘では、

(半分半分)

だったが、抱き起こした感覚で荒野だと解った。

荒野は半死半生と思われた。

郷田はコードの奥の方にライトを這わせた。

だが、何も見えなかった。

気配もなかった。

(これも天命か)

郷田は思った。

制限時間の一時間が近づいていた。

(これも天命だ)

郷田は、黄金仮面をその場に残し、荒野に鉄仮面を被せると、背負って蓋の裏を叩いた。

金之助がハッチを開け、二人を引張りあげると、再び閉めた。

鉄仮面を確認すると、特製のロープで己の身体に繋げる。

直後、ジェットが噴射した。

同時に郷田は海に飛び込むと、江ノ島に向かって泳ぐ。

コードが潮の流れと共に、沖に向かって、鋭くしかし厳かに流され始めた。